

茅野市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和4年8月10日(水) 開 会 午後 3時00分
閉 会 午後 4時20分
2. 会 場 市役所8階大ホール
3. 出席者 市長 今井 敦 教育長 山田 利幸
職務代理者 矢島 喜久雄 教育委員 永嶋 陽子
教育委員 勅使川原はすみ 教育委員 若御子雅英
出席職員 こども部長 五味留美子 生涯学習部長 北沢 政英
企画部長 田中 裕之 こども課長 阿部 香織
幼児教育課長 柳澤 澄子 学校教育課長 五味 正
生涯学習課長 竹内こずえ 文化財課長 五味 健志
スポーツ健康課長 伊藤 善彦 教育総務係長 春日 雅彦
教育総務係主事 小池 智也
4. 傍聴者 1名

茅野市総合教育会議次第

令和4年8月10日（水）午後3時00分
市役所8階 大ホール

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

(1) 今後の教育、学術及び文化の振興について

(3) その他

5 閉 会

○学校教育課長

茅野市総合教育会議を開会します。初めに今井市長からあいさつをお願いします。

○今井市長

皆様、大変お忙しいところまた、コロナ禍で大変な中お集まりいただきありがとうございます。

現在新型コロナウイルスの感染状況は高止まりが続き、医療機関へも影響が出始めている状況です。特に発熱外来については、多くの患者が訪れ、医師や看護師は、大変な状況だと聞いています。

本日も例年通りでしたら、懇親会を開いて様々な意見を交換しているところですが、時節柄なかなか開催できず、心苦しく思っているところですが、本日はざっくばらんにいろいろな話ができればと思いますので、よろしく願い申し上げてご挨拶とさせていただきます。

○学校教育課長

議事に移ります。ここからの進行は、今井市長に進めていただきます。

○今井市長

生涯学習関係を含め、教育全般について意見交換をできればと考えています。

まず、話のきっかけづくりとして、私の方からお話をさせていただき、ご意見をいただければと思います。

茅野市は、20年ほどパートナーシップのまちづくりという形で、様々な活動をしてきています。そんな中、活動をされている方々とお話をさせていただく機会では、「後継者がいません。何とかありませんか。」というお話が必ず出てきます。様々な要因があると思いますが、私なりに考えたときに、25年ほど前は茅野市のパートナーシップのまちづくりが、うまく動いていました。

一体なぜスムーズに動いていたのかを考えたとき、私は、やらざあ百人衆、福祉21、どんぐりネットワーク、美サイクルちのなど個別の活動が非常にスムーズで、そのベースには活発な公民館活動があったためそこから移行できたのではないかと考えました。

今の公民館活動は、カルチャーセンター化しつつあると思いますが、本来公民館活動というのは、学びと実践の場でした。昔の活動を記録等で振り返ると、地域の課題をみんなで学び、それをどのように解決していくかを考え、実践に移していく活動をしていました。

そんな活動を経験した人達が、やらざあ百人衆という形で集まり、それぞれ分野別で市民活動が展開していったという経緯があります。そのようなベースができている人たちなので、比較的スムーズに展開できたのではないかと仮説を立てました。

現在の公民館活動は、「学びと実践」の「学び」の部分が無くなってきていて、実践の部分だけ動いている気がします。そうなると、各分野別で活動している人たちは学んでいても、どんどん専門的になり、普通の人たちが取り残される状況ができちゃっているのではないかと見立てています。

そうした中、もう1度公民館活動を見直す時ではないかと個人的に思っています。

公民館と言うと、何となく古臭いイメージがあり、若い人はとっつきにくい部分もあるかもしれませんが、かつて茅野市の公民館活動を一生懸命やっていた頃は、合宿形式で研修会などを開く中で、他地区の人などを中心に横の繋がりができていました。その繋がりを通してまちづくりに関わっていけば、非常に連携も早く、公民館活動も活発なものとなると思います。

今、そのような研修会もなかなかできなくなっていて、そういった反省もふまえてこれから

の公民館活動、パートナーシップのまちづくりを考えていかなければいけないと思っています。

なぜそのように思ったのかというと、何年か前、私が県議員の最後の頃、長野県の総合戦略を作った際のキャッチフレーズは「学びと自治」でした。その意味としては、いろいろありますが、これを集約していくと公民館活動に近いところがあって、例えば、保健補導員制度が須坂市で起きて、それが全県に広がり、減塩活動を行っていくという流れとして「学びと自治」を実践してきた案件があり、そのベースがあるからこそ、パートナーシップのまちづくり手法は通用してきました。

しかし、昨今ではその動きがだんだん弱まっている状況だと私は思っています。

そのような現状を、皆様に投げかけさせていただいて、意見交換をしていければと思います。

○矢島職務代理

公民館に関わらせていただいた立場として、市長が公民館活動について取り上げていただいたことをうれしく思います。

「学びと実践」に関わって、いろいろお話がありましたが、戦後の大変な時期、公民館は生きるための学びの場であったと思います。少しでも食べるものをたくさん作るために、各地で稲を植える時は塩水選をする指導などが幅広く行われてきましたが、今はだんだんとそういった「生きるため」という部分が生活も豊かになったこともあり、弱くなってきていると感じています。

市長が言われたように、「学び」の部分に課題があり、「実践」の部分が目立つようになってきたと思いますが、このコロナ禍を通して、もう1度見直すべきなのは、公民館活動の原点である「人との繋がり」だと思います。人との繋がりとは、この3年間、各種のイベントはすべて中止、あまりいい言い方ではないですが、中止するかどうかの会議を開催して中止となっています。

さらに、コロナの影響でせっかく準備をしてきた活動が中止になると、それぞれの役員たちの地域を盛り上げて繋がってほしいという意欲が薄れてきているのではないかと考えています。

茅野市の公民館には、誇れる組織があります。さらに公民館には、積み上げられた歴史があります。ただ、この3年間で、積み上げの部分が崩れてしまっていないか心配です。

まず、人が繋がれるような今までやってきた実践を踏まえた活動ができれば良いと思います。

先ほど市長が、カルチャー化と言われましたが、カルチャー化すらできない状態で、サークル活動がとても心配です。3年間でどなたも年を取るのです、活動も停滞してきます。だからこそ何とかもう1回、公民館活動の基本的なベースに戻して積み上げていきたいという願いを持っています。以上です。

○市長

アフターコロナが心配だというお話でしたが、もう少しコロナ禍続くかもしれませんが、今から見据えて様々なことを考えて準備していかなければと思います。

○永嶋委員

私がこの約三年間で考えているのは、やはりコロナが教育だけではなく、保健や福祉など多くの活動に影響を与えているなということです。

公民館活動に関しても素晴らしいものが幾つもありましたが、延期されたり中止になってし

まったりしています。

そんな中、私がいつも思うのは、いろいろな地域の活動を見たときに、学校の活動は、中止になる割合が少なく、このコロナ禍でも規模や形態は変化していますが、何とか工夫して活動を継続しています。

私は、人間が平等に持っている権利は、「生きる権利」と「学ぶ権利」だと思います。「学ぶ権利」ということは、その人の学びたいことを自由に選択して、死ぬまで学び続けることができる権利だと思います。

そして、私はこの素晴らしい権利を子どもたちから奪わず、ずっと保障してあげたいと常々思っていますが、市長や矢島委員のおっしゃるように大人がその権利を主張して、行動しなければ、子どもにも学ぶことの大切さは伝わらないと思います。「学ぶ」ということは、学校に行き授業を受けるということだけではなく、命の終わるときまで学ぶことだと思います。

なぜ、素晴らしかった公民館活動が、コロナの影響で衰退してしまったのか考えた時に考えられる原因は、実生活にきちんと落としていなかったからだと思います。学びがきちんとその人の生活や人生に落とすことができ、さらに生かすことができる学びをしなければいけないとお話を聞いて感じました。

3月に中学校の卒業式に出席させていただいたときに、卒業していく生徒会長がおっしゃった言葉の中で、校長先生をはじめ先生方から「コロナや災害があったとしても、自分のものとして、絶対に守りたい日常は何ですか。しかしそれは、他の方の不幸など様々な理由でそちらが優先するかもしれない」と言われた時に、自分にとって、みんなにとっての日常について1年近く考え、行動してきたので、自身をもって卒業できます。とおっしゃっていて、すごうれしかったです。

やはり、コロナや予算の関係でできないことなどいろいろあると思いますが、本当に自分たちは何を学びたいか、また、何を生活に落としていきたいかを学ばなければいけないと思いました。

○今井市長

実生活に落とすことが大切という点に関して、非常に共感しました。その中から、自分が生きていく中で必要なことを学べる環境があるべきだと感じました。

○若御子委員

いろいろなお話をお伺いしていく中で、率直な私の感想は、経験不足や勉強不足の面もあり、そもそも茅野市が、他の市町村と比べて何が良くて、何が劣っているのかということがあまりわかっていないということです。

ただ、先ほどからお話にあがっているとおり、一番ベースになるのが、地域の繋がりや公民館活動だと私も思いますが、私も今から約六、七年前に地元の公民館の役員を、4年ほどをやっていました。いくつかの役に就かせていただき、最後には広報部長として、過去の引き継ぎ資料等を確認した際には、年々行事自体が減っていて、参加人数も減っていると感じていました。

そのような中で、当時の公民館の仲間と話をする機会がありましたが、その際に多く話題に上がることは、地元に住んでいる人より、新しく越してきた人の方が、公民館活動自体に参加しない方が多く、人口が減ってく中で、元から地元にいる人が、様々な役を兼務してしまうということでした。

具体的には、公民館の役員、消防関係、御柱祭関係、地元のお寺の役員など多岐にわたり、活動が負担で全く参加しなくなった仲間もいるのも事実で、そうなると負のスパイラルのよう

な形でどんどん活動が衰えていく現状があると思います。非常に難しい問題だと感じてはいますが、今後勉強して茅野市として何が良くて、何が悪いかという所を考えていきたいと思います。

○今井市長

いわゆる負のスパイラルは、もうすでに始まっていて、これから消防団の見直し作業に実際入っていきますが、様々な意見があり、現実として、消防団だけでなくいろいろな役が1人2、3役になってきている中で、茅野市に住んでいると多くの役をこなさなければいけないため、自分の土地があるのに、わざわざお隣の市に土地を買って、他市に家を建ててしまうケースは、実際見えています。

しかしそこから、消防団の活動だけは通っている団員もいて、本来の消防とは違う形態になってしまったり、年配の先輩方は、古い風習を押し付けてしまい若い人たちが非常に悩んでしまったりという問題が現実としてありますので、対策を考えていきたいと思います。

○勅使川原委員

公民館活動に関して、市長の考えは、パートナーシップのまちづくりの再構築は、公民館活動を基盤にやっていきたいと捉えました。

具体的にどのようにしたらよいか考えた時に、茅野市の中で公民館役員の活動は市の方もあれば地区の方もあり、それに加えて福祉21やどんぐりネットワーク茅野などいろいろな活動があった中で、一時はコミュニティセンター構想として地区コミュニティセンターの協議会の活動の中で地区を盛り上げていく活動や、「自助」、「共助」、「公助」のまちづくりという言い方で、それぞれの地区に自分たちの共助とは何か、自助とは何かということを勉強したこともありました。

例えば、どんぐりプランの中で子育て部会ができて、地区子育て部会としても作り、地域の子どもは地域で育てることを目的として、地域の中でそのような部会を作ったときに、そのメンバーは、その地域の民生委員、親、PTAや地区に関わる学校の先生方も参加していました。

各学校にコミュニティスクールが整い活動をしています。地域運協の子育て部会と何が違うのか、本来の目的は同じであると思いますが、同じような団体が作られたことで、元の活動が動かなくなっていることがあるのではないかと思っています。

コロナ禍の地区活動を見ていると、自主的に様々な団体の活動が芽を出してきています。

そのような動きは良いことだと思いますが、市が関わっている読み一むinちのなどの教育委員会で運営している団体も、本来必要なのか、自主的な活動に移行した方がいいのかを考えていくべきだと思います。

先ほどの子育て部会の関係も、コミュニティスクールの団体と一緒にした方がいいのか、リサイクルの関係は、まだ地域に残していかなければいけないのか。といったような団体の見直しを歴代の市長にもお願いしていますが、もう1度パートナーシップのまちづくりを再構築するにあたって、0に戻してからスタートするぐらいの勢いで、しっかりと見直す必要があると思います。

さらに今、高齢者が頑張っている高齢者大学などの自分たちの町で自分たちが生きていくために必要な団体の活動は、無理難題かもしれませんが、もう1度思い切って活動や団体の内容を見直しいただければと思います。

また、保育・子育ての関係では、様々な場所で子ども食堂もできていて、子どもたちの勉強を見てくれる場所もできてきていますが、本来地域の子どもの地域で育てる目的で作ったもの

が地区こども館で、寺小屋のように地域の人たちが子どもたちと関わって、勉強を見てあげたり、親が忙しいときは一緒に遊んだり、いけないことをしていたら叱るようなことを望んで地こども館がスタートしたにも関わらず、大きく形が変わってきています。

時代やニーズの変化で仕方がないと言ってしまえばそれまでですが、自分たちの子ども、地域の子どもの地域で育てることを考えた時には、子どもの居場所となる核の部分をもう一度見直すべきではないかと思います。以上です。

○今井市長

この課題は多くの方が感じていて、なかなか修正や見直し、できない状況が続いてしまっている部分があると思います。

そこで、本当の茅野市のまちづくりの原点である公民館活動へもう1度スポットを当てていくということも必要だと感じるとともに、今、勅使川原委員が言われた今までの様々な活動を1度振り返り総括し、次の段階に移行する作業が必要だと思います。

当初のねらいとは大きく変わってきていたり、今の時代に合わなくなってきたりする活動や施設もあるかと思っています。

子育てや学習環境などの環境も変化があり、それに伴って親のニーズも大きく変わってきている現状もありますので、1つの理想を目指しながらも現実に合わせていくということが必要だと思います。

教育会議ではありますが、まちづくり全体の話にも繋がりスケールの大きな議論になってきましたが、ここで公民館活動から話題を切り離して、委員さんの中で情報交換したい内容があればご意見をお願いします。

○矢島委員

県の教育委員会等の研修会へ出席すると話題になるのは、1つがICTで、もう1つは中学校の部活動の地域化です。

実際に地域化をどんどん進めていたり、或いは研究校を設けていたりする地域もあるようです。

今、夏の高校野球が行われていますが、子どもの頃から何かに関わって、中学校、高校、大学に進学していくにつれてそのスポーツや芸術等から離れてしまう人がほとんどです。

私の願いとしては、自分が本当に好きなスポーツ、芸術やその他活動を生涯にわたって関わって、生きがいにつなげていければいいなと思います。

議論の趣旨とすれば、中学校の部活動の地域へ移行の動きが、国の施策として、話題になっている中で、茅野市としてはどのように考えているのかお聞きしたいです。

○今井市長

ICTや部活動についてお話がありました。

後ほど現状をご説明いただくとして、矢島委員のお話に関わって、もしくはそれ以外にご意見ありましたらお願いします。

○永嶋委員

お話を聞いて、子どもたちがスポーツにかかわらず、自分が興味を持ち続けることができる活動があればと思います。

その他のことに関しては、市長のおっしゃっていた今、目の前で問題になっていることも、対応するべきだと思いますが、スポーツに関しては部活動だけではなく、社会人になってから

も活動を継続できる設備を整えていくことも大切だと思います。

○若御子委員

私の会社の従業員のお母さんの話になりますが、その従業員は、子どもが休みの間は、会社を休みたいと長期で休んでいます。

会社とすれば、正直出勤していただきたいですが、それぞれ家庭の事情もあるので、一旦その要求を認めましたが、他の従業員からは、「あの人はそれでいいのか」という苦情も出てきてしまいました。

休んでいるお母さんからすると、子ども預ける場所もあるようですが、時間や場所の問題やお母さんの考え等々で実際預けられず、結局会社を休むという形になってしまっています。

そこで、そのような状況になった時に、市としてフォローはしていただいているかと思いますが、実際にどのようなフォローをしていただいているのかお聞きしたいです。

○市長

他の議題と併せてお話をいただきます。

勅使川原委員お願いします。

○勅使川原委員

私も矢島先生のお話にあったICTの関係について、新聞等々でも取り上げられていたので、気になっていました。

GIGAスクール構想によってタブレットを用いての学習は、どんどん進んでいますが、現在、そのAI教材を使って、先生の代わりに「個別」で「最適」な教育を与えるための教材を導入していく方向に動いているようで、長野県も試験的に公立高校等に導入しているようです。

長野県をターゲットに、いくつかの塾にその教材を入れて使っていて、この近辺では諏訪にもあるという話です。

このAI教材は、いろいろな子どもがいる中で、やる気がある子にとっては良い教材かと思いますが、やる気のない子にやる気のスイッチを押して、いい学習につながられているかはわかりません。

やる気のスイッチを入れてあげることが、子どもたちにとって何より大事だと思うので、そのスイッチは誰が、どのように入れてあげることができるのかを悩んだり、また、発達障害の子どもに関しては、苦手なことの克服に大変時間がかかりなかなか大変なことですが、少し優れているところがあったりして、それを見つけてあげられるのは誰で、どのような方法が良いかということを考えていたり、今子どもたちにとってどういう環境が大事で、これからの伸びていくには何が必要なのかということを考えています。

その点について、市長の考えをお聞きしたいと思いました。

また、部活動に関して私が思ったのは、前々から外部コーチの人材不足と言われてきています。

身内にも小中高大と経験している方がいますが、子ども達を見るときはボランティアなので、遠征に行くときは自費で宿泊代等を捻出しています。

中学校であれば、平日は先生がある程度まで生徒の面倒をみるのが、中学校の部活のあり方としてふさわしいと思いますが、部活後や週末の活動は、少年野球のコーチとして子どもたちに指導してきた方々に中学校で見ただけのような体制を、金銭面等を含めてこの行政がサポートできれば、人材確保もできると思いますが、なかなか実現はできていない状況です。

部活動等の指導員は、ボランティアではなくて、有償にしなければ人材の確保は難しいかと思ひます。

指導者にとつても生涯の生きがいとなるという考えを大切に進めていけたらと思ひます。

○今井市長

部活の地域化に関しては、後ほどご説明あると思ひますが、部活動の指導員の関係は、個人的には勅使川原委員がおっしゃたように有償化していかないと難しい問題だと思ひます。

ただ、有償化するとなると、相応のレベルが確保されていなければ、行政としてお金を出せません。

しかし、部員の親同士でお金を出し合い、遠征費等をお支払いすることは不可能な場合もありますので、様々な方法を模索していければと思ひます。

発達障害の児童への最適な学びの関係は、当初からギフト教育として、最適な学びを模索してきましたが、後ほど教育長先生からお話をいただけると思ひますが、コロナ禍ということではなかなか思うように進められない状況にあります。

先に、ICTや部活動、先ほど若御子委員がおっしゃった子育てサポート制度の現状を説明いただけますか。

○学校教育課長

中学校の部活動に関しては、今後、少子化によって各学校でチームが組めなくなると考えられます。

また、専門的な指導ができる先生の不足によって、国から地域へと移行する旨提言されています。

地域で受け皿を用意して、子どもたちの運動する機会、部活動をする機会を確保するよう進めている状況で、令和5年から令和7年にかけて移行していくことになってはいますが、地域差が非常に多く、都会であれば核となる団体、個人が多くいらっしゃると思ひますが、この諏訪圏域で考えたときに、どれだけの受け皿となる団体がいらっしゃるのかというのは非常に危機を感じている状況です。

現状、各中学校にお1人ずつ、部活動指導員を学校からの要望に基づいて、水泳、バレー、吹奏楽の部活へ配置しています。

顧問の先生方も、顧問になったので何とか頑張っている先生や部活動の指導をしたくて指導されている先生もいらっしゃると思ひますが、一生懸命指導されている先生が異動してしまうとその学校の部活動が衰退してしまう問題もあります。

この問題は、中学校3年間の部活動のみに関わる話ではなく、地域全体の課題になると考えています。以上です。

○教育長

部活動の関係、私の方から補足します。今、課長が最後に地域全体に関わった問題という話をされましたが、茅野市の場合、1番地域を上げて盛り上げていくスポーツはスケートかと思ひます。そのような長期的なことまで考えていきたいと思ひます。

部活動の地域については、2つの側面から考えていく必要があると思ひます。

1つは、地域の特性を生かした運動を的確に指導していく方向性です。

もう1つは、県で提唱している「ゆるスポ」という形で、1つのスポーツを専門的に活動していくと同時に運動全般を楽しむという方向性です。

その2点から、これからの地域スポーツのあり方をもう一度整理していきたいと考えていま

す。

その中で、部活動をどうするかという問題がでてきますが、ちょうど4年ほど前に働き方改革県の委員会に部活の地域化という視点から参加して、いくつかの自治体が地域化に向けて取り組んでいましたが、人が足りず上手くいっていませんでした。

9月中に関係者会議を開いて、今後の方向性について打ち合せをしたいと思います。

ICTの関係は、大きく進展することができましたが、今一番議論に上がっているのは、AIを用いた学習が子どもたちにとって最適であるかどうかです。一番大切にしたいことは、体験と共同で、その中でAIとの関わりをどうしていくかが大きな課題になっていますが、まだ国、県もあまり議論が深まっておらず、ようやく入口に差しかけたところですよ。

GIGAスクール構想の中の「個別最適化された」という言葉は、文科省の「主体的対話的で深い学び」「協働的な学び」をどう結びつけるか、その整理が始まっている段階です。

茅野市の場合は、機器の面は何とかクリアできたので、学びの部分は今後どのように生かしていくことを考えていきます。

○今井市長

子育てに関する支援体制についてご説明をお願いします。

○こども部長

お話をお聞きした限り、お子さんは小学校低学年くらいかと思いますが、市内全9小学校には学童クラブを設置しており、働くお母さんはとても増えていますので、小学生の預かる場所としては、学童クラブを支援体制として整えています。

以前は、小学校3年生までの受け入れでしたが、現在、小学校6年生まで拡大して受け入れをしている中では、年々高学年の利用者も少しずつ増えている状態なので、一定数のニーズは、あると感じています。

施設の管理面もありますが、基本的には空き教室等を利用して、ある程度学校生活と分離した形で、学童クラブができるような体制を整えています。ニーズ、利用者が増えてしまうと校舎内で独立した場所を保てないことが課題です。

そのような課題もあり、お母さん方には学童クラブを使いたくないという方もいらっしゃると思います。

昨年、地区こども館の見直しをしたときに、高学年になるとある程度自由に放課後遊びたい児童が多く、一応日程を組んでいる学童クラブでは窮屈になってしまうので、地区こども館を利用している場合が多くありましたが、学校の帰りに地区こども館を利用して、そのままカバンを地区こども館に残し、外に遊びに行ってしまう事案も発生していて、安全管理の面で課題があります。

また、学童クラブは利用していませんが、迎え待ちでこども館を利用していることが圧倒的に多いので、学童クラブと地区こども館の差別化を今後考えていきます。

就労するお母さん方のための施策は以上のように整えさせていただいています。

○若御子委員

子育て支援の施策に関してはある程度把握しました。

それに関わって、そのお母さんは、低学年の娘さんが1人いる母子家庭で、数ヶ月前に母親が亡くなってしまい、既に父親は亡くなっていて、兄とは不仲で全く今交流がない状態なので、お母さんからすると、孤独を感じ、精神が不安定になることがあります。

行政として、そのような孤独を感じている家庭が相談する窓口のようなものはありますか。

○こども部長

こども課には、育ちあいちのがありますので、まさに孤独を感じたりするお母さんが声をかけていただければ、しっかりとお話聞く職員がいますので、ぜひご利用いただければと思います。

○教育長

2学期に各学校を通じて、パンフレットを配布する予定です。
今後も、育ちあいちのをしっかりと周知していきます。

○今井市長

今までの意見・質問等を踏まえて、教育全般に関わって教育長よりお話をいただきたいと思えます。

○教育長

皆様のご意見に全てお答えできるかわからないですが、先ほど、勅使川原委員がこども館の考え方についてお話されたことに関わって、私が20年近く前に、茅野市のある学校で教頭をしていた頃に、その地区にはやんちゃな子ども達がありました。

こども館の先生からも苦情がきて、私も困ってしまい校長先生にこども館に誰が来ているかチェックしてきます。と伝えた際に「地域で子どもを育てるということは、先生や地域の人が子どもを監視することではない。」と怒られてしまいました。

地区こども館、学童が子どもの居場所として確保していくことが、保護者の支援にもつながっていくと思います。

公民館については、1学期コロナが少し収まった時期に生涯学習部長と公民館活動について、視察等を行いました。全国的にも活動のレベルが大きく落ちていると感じました。

矢島先生が関係を作ってくれた長野市の長沼地区では災害に伴う地域の復興ということで公民館活動が盛んに行われていましたが、その他の地域は落ちているようです。

コロナ禍に課題はありながら、茅野市の公民館活動は、高齢者大学に90人近い方々がいらっしやったりして何とか頑張っている状況です。

教育全般の私の見解として、お手元の表をご覧ください。

青い外線の部分が従来の「学校教育」として教育委員会を中心に取り組んできましたが、黄色枠の「多様な学びの場」という所とその外の「社会教育」の部分に力を入れていかなければ真ん中の学校教育は成立していかないと考えています。

具体的に、今「学び」といえば、本、テレビ、ラジオ、講座などが多いですが、やはり「学び」とは市長が言ったように地域の課題をみんなで集まって、議論して解決していくことであり、そのことが子どもの学びにも影響してきていると思います。

「学び」は地域やそこに住む人のためのものだという姿を子どもの世代につなげていくために社会教育、生涯学習のあり方を位置づけ直さないと、本体の教育もあやふやになってしまうと思います。

先ほど、子どもたちのやる気にスイッチを入れるという話もありましたが、学校だけでなく、「学び」の姿を見せながら家庭でスイッチを入れてあげることが大切だと思います。

以上のように、今年来年で重点におきたいことは、社会教育、特にその中で公民館を中心とした多様な学びの部分に力を入れていきたいと思えます。

実は表中の公民館活動の部分には少し秘密があり、公民館活動の矢印の部分学校教育に食

い込んでいます。

これは、学校教育と公民館活動が、今までにない形で結びついたときに教育の在り方が少し変わってくるのではないかと思ひ表を作成しました。

これに関わってある校長先生は、公民館活動と学校教育の結びつきについて素晴らしい意見を持っていて、それは追々ご紹介します。

あとは、表の通り、茅野市の人の場合は学ぶ拠点が幾つかあります。尖石考古館、守矢史料館、市民館、総合体育館、スポーツ公園等の学びの拠点を核として、公民館活動と併せて社会教育というものを再構築していき、そしてさらにその中に、多様な学びの場を作っていくという方向性を考えています。

○今井市長

教育長のお話を聞いて、ご意見ご質問ありましたらお願いします。

○勅使川原委員

先ほどある校長先生が、公民館活動と学校教育の結びつきに関わっていい案を持っているとお聞きしましたが、具体的に教えていただけますか。

○教育長

従来の発想だと、公民館で講座を開き、児童・生徒が学びを深めていく発想でしたが、今回はそれとは違った発想です。スタートしたところで詳しくご説明します。

○今井市長

他にありますか。

○永嶋委員

いただいた表はとてもいいなと思います。破線で周りを大きく囲ってあるので、年齢を含め学ぶことを制限せず、誰でもずっと学び続けることができることはとても大切なことで、この中から何を学ぶかということ自分を自分は何を学ぶかということ子どもだけでなく親の世代も目標を持っていければと思います。

○今井市長

ありがとうございます。

他にありますか。

○矢島委員

このとてもすてきな表のとおり、実現できればいいなと思います。

公民館活動の充実を期待していますが、現在コロナ禍で様々な活動、具体的には講座ができない状態が続いています。

そうすると、予算が余ってしまい、次年度予算が削られてしまうことがとても心配ですので、ぜひ図のように実施できるようご支援をいただければと思います。以上です。

○教育長

この図をもとに、皆でもう一度内容を詰めていきたいと思います。

約2年半、コロナ禍で様々な活動が中止になってしまっていますが、その中でもう一度子ど

もの生活・学びの再構築をしていかなければいけないと思っています。

日本の教育で一番いい面は、小さいうちから子ども同士が群れて、くっつき合いながら生活していく所にあります。

ただ、それがなくなってしまうため、本当に人間として大事なところが欠けてしまう可能性があると思います。

自然と、さらに子ども同士で触れあいながら、茅野市の学びを深めていきたいと思っています。

○今井市長

今日は、何か結論が出ず会議ではなく、皆様からいただいた意見を今後を生かしていくというものになります。

茅野市には、様々な課題がありますが、「学び」という分野において、子どもたちの学習環境に関しては、積極的に整備できていると思います。

一方で、大人の学びという部分については、公民館活動だけではなくて、市役所内部の職員研修も積極的に取り組むべきだと思います。

やはり、そういった面にあまりお金をかけない状況が続けばどうしても劣化が始まってしまうので、よりよい学びができる環境を整備していくべきだと思います。

ただ一方で、勅使川原委員からもお話がありましたように、市民活動が多岐に渡っていて、すべてを職員がサポートすることが無理な状況にあるので、「学ぶ」というテーマを尊重しつつ課題に取り組むべきだと思います。

また今後、消防団の見直し等にも入っていますので、「防災」という観点から地域の方々とお話をしなければならぬと思い、その準備を進めています。

生涯学習のテーマとしての「防災」というのは、個人的に身近なテーマであり、みんなが取り組みやすい、或いは意見を出しやすいことだと思います。

もし、大きな地震について地域全体で考えたときに、地域内で足が悪い方や高齢の方の安全を考えた時に福祉の話にも関係してくるといったような多岐に渡る議論を交わす中で、全市民が同じ土俵で物を学び、物を考える、そんな形を作っていければと感じました。

教育委員の皆様には、「学び」というポジションから様々なご意見や活動にご協力をいただければと思います。

それでは最後に何かご意見、ご質問ありましたらお願いします。

○教育長

先ほどお話した地区こども館に関しての話は、私個人として、こども館はこうあってほしいを思い発言をさせていただきました。

○今井市長

司会を学校教育課長にお返しします。

○学校教育課長

以上で総合教育会議を閉会します。